

東ベルリンの「森 鷗外記念館」

藤 井 啓 行

文芸作品を読む場合、一般にその作品の背景についても知るところが多ければ多いほど、よりいっそう深い興味が湧くことは言うまでもない。世に知られた作家たちに関する「記念館」の存在理由も、そこにこそあるのだろう。今から4年前の昭和59年に、ロンドンでかつて夏目漱石が下宿していた家（現存）の近くに、かの地での漱石記念館が発足したが、たまたま時期を等しくして同年の東ベルリンでは「森 鷗外記念館」が開設された。いま漱石のことは措くとして鷗外についてのみ触れるならば、社会主義国では従来とかく「反動」として黙殺されがちであった彼が、このように評価されるに至ったことについては、近頃のわが国のめざましい経済的発展とも無関係ではないであろう。

私自身は、鷗外という近代日本の巨大な山脈と専門にかかわる者ではなく、一介のドイツ文学の学徒として彼の世界をも心ひそかに愛する一人にすぎないが、東ベルリンにおけるこの「快拳」には、何か心温まる思いがする。日本の鷗外愛読者の立場からしても、鷗外初期のドイツ三部作（「舞姫」、「うたかたの記」、「文づかい」）や「獨逸日記」等、留学時代の直接体験に基づいた作品の場合にはとりわけ、よりよき理解のためには、それぞれの舞台になっている現地（ベルリン・ミュンヘン・ドレスデンなど）に赴き、作者の足跡を詳しくたどることがやはり大いに望ましいと言えよう。その際、右の記念館を探訪の一つの手掛かりにして、ありし日を偲ぶのもまた意義のあることではなからうか。

明治17年8月24日、23歳の陸軍軍医森 林太郎（鷗外）は、ドイツへの官費留学のため渡航の途に就き、10月11日ドイツに到着した。そして当時の首府ベルリンでの研究の開始は2年後の20年4月16日のことであり、この地での滞在は、翌年7月5日に帰国のため出発する時まで続いた。その

最初に定めた下宿は、マリー街（32番地）と旧ルーゼ街（現ヘルマン・マーテルン街39番地）との交わる角地に位置していたが、彼はここに4月18日から約2か月間を過ごした。全部で3か所あったベルリンにおける下宿のうち、この最初のものだけが、第二次大戦の戦火をくぐり抜けて完全な形で残ったのだが、これを発見した（昭和39年）の当時東ベルリンに逗留していた日本の一学者（篠原正瑛氏）であったという。

昭和59年10月13日、先述のようにこの場所に記念館開館の運びとなり、この日を期して盛大な記念式典が、当地のフンボルト大学（旧ベルリン大学）で行われた。当時在独中の私ども夫婦もこれに参加し、また同日、右記大学の日本学科（主任教授ユルゲン・ベルント氏）の案内で、同学科が管理する記念館を見学した。私が幸運な同館見学第1号の一人となったのは、「森 鷗外記念会」（事務局は東京都文京区立鷗外記念本郷図書館内）の主催による「独逸紀行」団員の一人としてであり、この件については、長谷川泉氏の『鷗外文学と「独逸紀行」』（昭和59年明治書院発行、3,500円）の中に詳しい。

さて右記の建物は地上4階・地下1階から成り、鷗外居住の部屋はマリー街を見下ろすその2階にある。建物全体の正面入口はマーテルン街側にあつて、この入口の向かって右側の外壁には鷗外旧居を示す記念額が取り付けられており、それには鷗外が日本近代文学の創始者の一人としての作家・批評家で、また数々のドイツ文学作品の紹介者であることが記されている。なお近年、全長300メートルに及ぶマリー街全体を、できる限り鷗外留学当時の姿に復元しようとする作業が、東ベルリン市当局の手によって行われた。

ところで鷗外下宿の部屋の大きさは25平方メートルほどかと思えるが、その後の建物内の改修工事の状況から見て、内装に関してはもちろん当時のままというわけにはいかず、家具・調度なども殆どが変わってしまっている。しかし記念館開設に尽力された前記ベルント教授によれば、綿密な考証を経ているから、鷗外起居の様子を十分想像させるものばかりであるそうだ。室内のものでひときわ眼をひくのは、壁に掛けられて下を見下ろしている鷗外のデスマスク（複製）である。

ついであるが、昨年（注。昭和62年）10月28日から12月5日にかけて、

ミュンヘン市内のバイエルン州立図書館（西独最大の研究用総合図書館）においてヨーロッパで最初の「森 鷗外展」が行われ、大きな成果を収めた。これはハイデルベルク大学日本学科主任ヴォルフガング・シャモニ教授が文字どおり中心になって実行に当たったもので、これに先立つ10月27日の盛大な開会式に私も参加した。なおその前に、他の鷗外記念会の人々とともに、東ベルリンの記念館を再度訪問した。この「鷗外展」に関しては、記念会発行の半年刊研究誌『鷗外』第43号（昭和63年7月）が大部（401ページ）の「ミュンヘン森 鷗外展特集」となっていて、その中に詳しい。

また西ベルリンの旧日本大使館を修復・再建した「日独センター」は、昨年11月8日にベルリン開市750年記念の開所式が行われたのち、その内装も本年4月に一応の完成を見た。先の「森 鷗外展」がここで再びこの日独センターの「こけら落とし」として、4月13日から5月20日まで同所において開かれたのだが、会期中およそ8,000人の観覧者があったということである。

なお最後に鷗外の「舞姫」が篠田正浩監督による日独合作で映画化されることになったが、その日本での撮影はすでに完了して、製作は現在なお進行中であり、来年6月には日本で公開される予定である。主人公の太田豊太郎役には郷ひろみが選ばれ、6月の時点ではその相手のドイツ女性エリスの役が未定ということだが、東西両ドイツが初の映画製作協力ということもあって、東ベルリン・ロケなどを含め、今からその公開が期待される。

——「関西東大会会報」第2号（1988年10月）より転載——